

波照間島で記録された鳥類とその方言名について

嵩 原 建 二
島 村 修
加治工 真 市

はじめに

波照間島は日本最南端の島で、北緯 $24^{\circ} 01' \sim 24^{\circ} 03'$ 、東経 $123^{\circ} 45' \sim 123^{\circ} 48'$ に位置し、八重山諸島の石垣島から南へ約56km洋上に浮かぶ、島面積 12.46km^2 、周囲 14.62km の島である。波照間島の地質については、図1に示したように大部分が隆起サンゴ礁からなる石灰岩で占められ、最高標高も59.9mとほぼ平らな島である。

波照間島の植生については、新納(1981)によって調査され、御嶽林で見られる植生についての報告がある。これによると概ね高木層にクワノハエノキ、テリハボク、クロヨナ、アカテツ、シマグワ、タブノキ、リュウキュウガキ、オオハマボウなど石灰岩地域や海岸林に特徴的に出現する種を報告している。しかしながら、今日では農耕地の拡大によって、森林地域は少なくなり、島の中央部の集落近くの拝所(御嶽)や島のまわり植林されたと思われるフクギやテリハボク等の防風・防潮林などがわずかに残存しているだけである。

波照間島を含む八重山諸島の鳥類については、八重山野鳥の会(1983)によって56科294種の野鳥が報告されている。しかしながら、その報告には波照間島から記録された鳥類については明確に示めされておらず、野鳥の方言名を紹介した章で23種の野鳥が波照間島の方言名で示されているにすぎない。それ以外には琉球新報社編(1983)、宮城(1974)、嵩原(1994)などに一部報告が見られるが、波照間島で確認されている鳥類は少なく、鳥類に関する知見は不十分であるように思える。

今回の総合調査ではさらに島の人々が野鳥とどのような関わりをもっているかを知るため、野鳥の方言名についても収集するように努めた。生物の方言名を収集することは、民俗学的な無形文化財の収集としての重要性もあるものと思われるが、島にすむ人々がどのように自然を認識しているかの手がかりとなり、同時に生物学的な意味では潜在的な生物相をうかがい知る一つ方法に成り得るものと思われる。これまで南西諸島における生物の方言名については、当山(1983, 1984, 1987)や野原・宮城(1988)などの報告が見られる。植物の方言名については、天野(1979)の先駆的な著書が知られており、さらに天野(1981)は、波照間島を含む先島諸島に所在する御嶽林に出現する植物の方言名が報告されている。

筆者らは波照間総合調査の一環として、1996年8月から1998年3月までの足掛け3年間に、3回にわたって波照間島に訪れる機会を得ることができ、波照間島に生息する鳥類の

記録や方言名について若干の知見を得たのでここに報告する。なお、波照間島における野鳥の方言名については、前述したように八重山野鳥の会編（1983）によってなされているが、さらに方言名の収集を試み、名前の由来や人との関わりなどを整理し、さらに言語学的にみた語彙の転訛などについて若干の検討を加えた。

本報告においては鳥類調査については嵩原が担当した。また、野鳥の方言名は島村が採集・録音し、その音声表記については加治工が担当した。この報告が波照間島の鳥類相や野鳥の方言名を理解する一助になれば幸いである。

本報告をまとめるにあたり、波照間島における現地調査の際、車両の提供等に協力いただいた波照間中学校校長の普天間朝光氏、また貴重な鳥類情報を提供していただき、かつ現地調査に同行していただいた波照間中学校の西里正善氏、さらに沖縄電力波照間営業所の金城裕光氏には、貴重な鳥類情報を提供していただいたので感謝申し上げます。

調査方法

現地調査では図2に示したように特に調査ルートや時間を定めず、車両を使って島全体の町道や農道をくまなく走り、目撃された鳥類の記録に努めた。特に島内数カ所設置された農業用溜め池では重点的に調査を実施した。また、図2に示したように、環境庁が作製した自然環境保全基礎調査用の基準メッシュ図をもとに、波照間島を1.3km×0.9kmの広さで15区画に区分したメッシュの内、13メッシュについて、30分間同一メッシュ内に

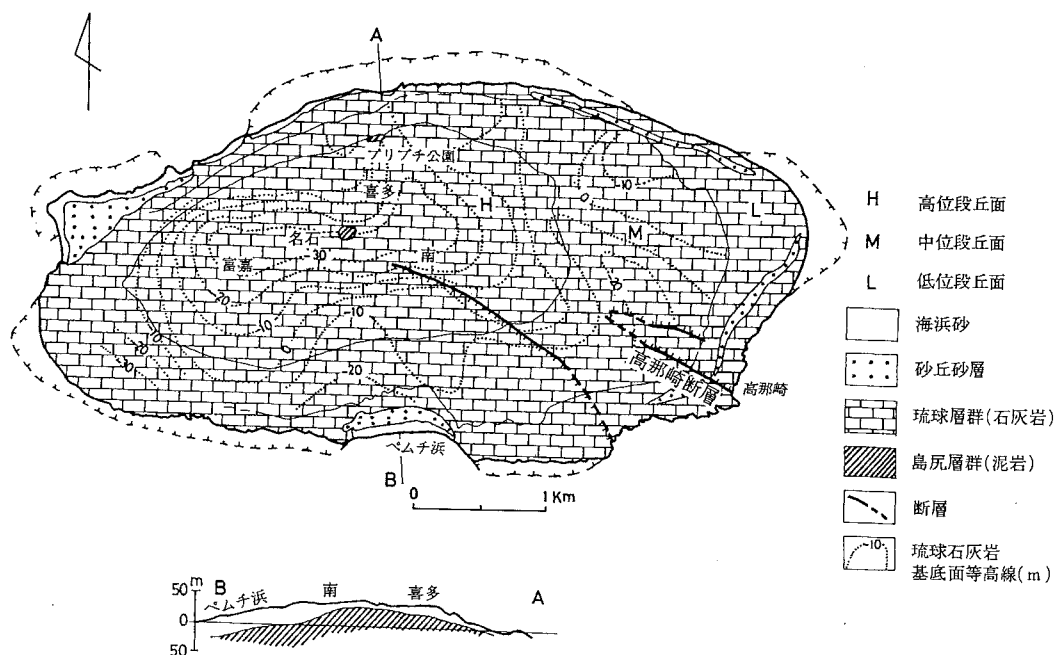


図1. 波照間島の地質図（木崎1985を改変）

留まり、出現鳥類を記録する定点メッシュ法により鳥類調査を実施した。なお、鳥類の目撃には8倍の双眼鏡も使用した。その調査日や時間等の調査概要は、表1に示したとおりである。さらに、調査資料の一部には現地での聞き取り調査や波照間中学校野鳥クラブで確認された種についても採用し、鳥類目録に加味した。

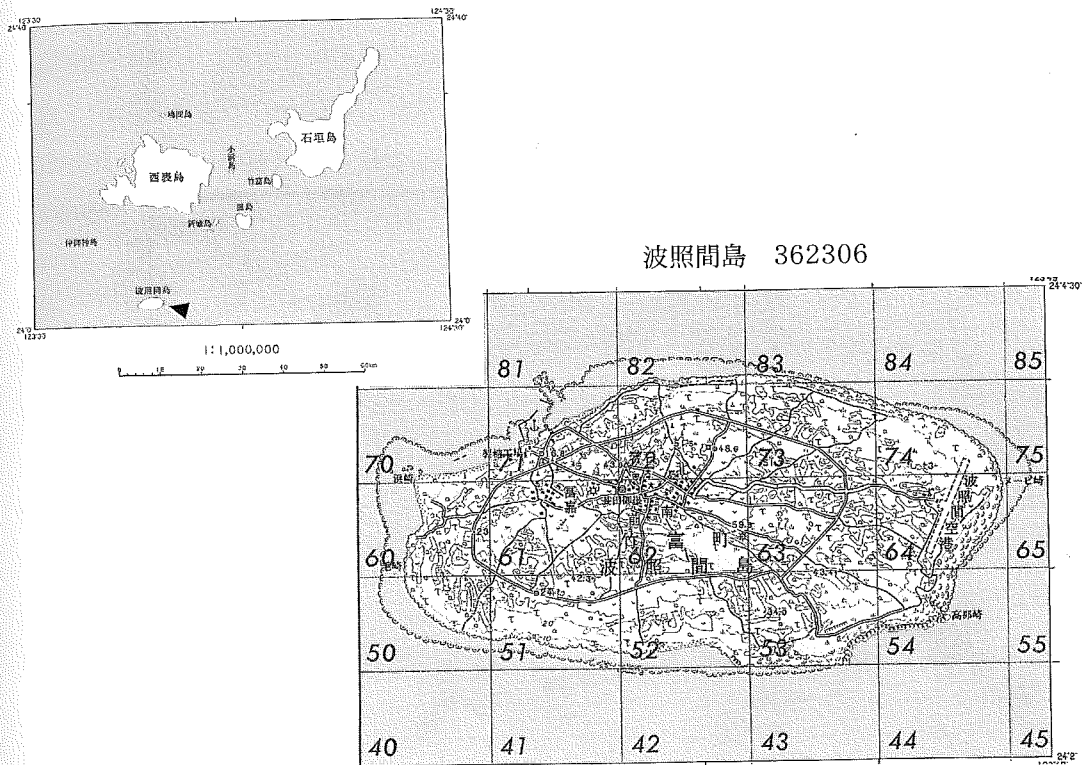


図2. 波照間島の地形及び定点メッシュ調査地
(環境庁自然環境保全基礎調査用メッシュ図を改変)

表1. 鳥類調査概要

調査日	天気	時間	備考
1996/8/21	晴	13:00-18:00	島内全域
1996/8/22	晴	6:00-18:00	"
1996/8/23	晴	6:00-18:00	"
1996/8/24	晴	6:00-18:00	"
1996/8/25	晴	6:00-18:00	"
1996/8/26	晴	6:00-18:00	"
1997/9/3	晴	6:00-18:00	"
1997/9/4	晴	6:30-19:15	"
1997/9/5	曇	6:30-13:00	"
1998/2/24	雨	12:00-20:00	" 定点メッシュ調査
1998/2/25	曇	7:00-16:00	" 定点メッシュ調査

調査結果と考察

1. 波照間島で観察された鳥類

今回の調査では、延べ3回、12日におよぶ現地調査で表2にまとめて示したように、60種の鳥類が確認された。その中にはこれまでに波照間島で報告されていないセイタカシギ、ウズラシギ、エリマキシギ、カワセミ、アカアシシギ、アカヒゲ、タゲリ、ツバメチドリなど36種の鳥類が確認された (PLATE)。

今回の調査記録にこれまでの鳥類記録や聞き取り調査などを総合して波照間島の「鳥類目録」作成を試みてみると、巻末に示したように、11目30科77種 (亜種含む) の鳥類が記録されているものと思われる。その内訳は便宜的に生息現状でおおまかに分けてみると、留鳥19種、渡り鳥が56種 (夏鳥6種、冬鳥及び旅鳥50種)、不明が2種であった。

留鳥の出現状況では、県内では留鳥とされるウグイスとカルガモの2種の生息は冬季に確認され、繁殖の有無が不明であるので、留鳥の種数からは除外した。また、沖縄島や石垣島、西表島など島面積の広い島の森林地域で生息するシジュウカラ科とキツツキ科に属する種が確認できなかった。さらに、渡りを行う鳥類の確認状況は、波照間島では河川や干潟が存在せず、このため水辺を利用するシギ・チドリ類やカモ類が15種と少ない傾向が見られた。しかしながら、島内には数カ所の農業用水用の溜池が所在し、こうしたわずかな水辺環境にセイタカシギ、エリマキシギなどのシギ類や、コガモ、カルガモ、ハシビロガモなどのカモ類の渡来が確認された。おそらく、今後調査がすすむことで、留鳥や渡り鳥の種数については若干変動するであろう。

1-1. 各種の生息現状の概要

1) 留鳥の生息状況

波照間島で調査期間中に確認された留鳥は、セッカ、オサハシブトガラス、ヒヨドリ、メジロ、キジバト、シロガシラ、カワセミ、アオバズク、コノハズク、ミフウズラ、バン、シロハラクイナ、スズメ、ツミ、クロサギ、イソヒヨドリ、カイツブリ、シロチドリの18種であった。この記録に聞き取り調査でオオクイナが確認されたので、全体で19種になる。しかしながら、今回の現地調査では出現しなかった鳥類で、後述するように野鳥の方言名で識別され、留鳥として生息しているものと思われるズアカアオバト、ヒクイナ、リュウキュウヨシゴイなど3種を加えると合計22種の留鳥が生息しているものと思われる。これが波照間島における潜在的な留鳥の生息状況と思われるが、ズアカアオバトやヒクイナなどは、土地改良事業等による森林地域や湿地の減少により生息地の減少がすすみ、個体数が激減しているものと思われる。なお、オオクイナについては、波照間中学校の西里正善氏 (私信) によって1997年9月に鳴き声が確認されているので、少数が生息しているもの

と思われる。しかし、現地調査で生息確認をした地上を徘徊するミフウズラは、調査期間中にわずか2個体が目撃されただけで、個体数の減少が考えられる。これは1960年代に野鼠の害を減らす目的でイタチが導入（移入）されており（Uthida, 1969）、地上を徘徊するミフウズラはイタチに捕食される可能性が高いことが考えられるので、イタチはミフウズラの個体数維持に何らかの影響を与えているものと思われた。

1997年8月の調査で確認されたカワセミは、島に散在する農業用水を確保する溜池等で目撃され、亜成鳥も見られたのでここで繁殖していることは明らかである。

興味深いことに、県内では普通に生息しているリュウキュウツバメの生息を確認することができなかった。なお、シロガシラは、中村・花輪（1987）で亜種が明確にされていないので、*Pynonotus sinensis*とした。

表2 調査期間内で確認された鳥類

調査年度	1996	1997	1998	セイタカシギ	○	○	○
調査期日	8.21-8.24	9.3-9.5	2.24-2.25	ツバメチドリ			○
種 名				クロハラアジサシ		○	
カイツブリ	○		○	ベニアジサシ	○		
ゴイサギ		○		エリグロアジサシ	○		
アマサギ	○	○	○	クロアジサシ	○		
アオサギ			○	キジバト	○	○	○
ダイサギ			○	コノハズク	○	○	○
チュウサギ		○	○	アオバズク	○	○	○
コサギ			○	アカショウビン	○		
クロサギ	○		○	カワセミ		○	
コガモ			○	ツバメ	○	○	○
ミサゴ			○	ツメナガセキレイ		○	
ツミ	○		○	キセキレイ		○	○
サシバ			○	マミジロタヒバリ			○
チョウゲンボウ			○	タヒバリ			○
ミフウズラ	○			シロガシラ	○	○	○
バン	○	○	○	ヒヨドリ	○	○	○
シロハラクイナ	○	○	○	アカモズ	○	○	○
コチドリ		○	○	アカヒゲ			○
シロチドリ		○		ノゴマ			○
ムナグロ	○	○	○	イソヒヨドリ	○	○	
タゲリ			○	シロハラ			○
キョウジョシギ		○		ウグイス			○
ウズラシギ			○	セッカ	○	○	○
エリマキシギ		○		メボソムシクイ			○
アカアシシギ		○		キマユムシクイ			○
アオアシシギ		○		サンコウチョウ		○	
タカブシギ	○		○	メジロ	○	○	○
キアシシギ		○		スズメ	○	○	○
イソシギ	○	○	○	オサハシブトガラス	○	○	○
タシギ			○	合計60種	27種	32種	43種

2) 夏鳥の生息状況

波照間島ではサンコウチョウ、アカショウビン、ベニアジサシ、エリグロアジサシ、クロアジサシ、カツオドリの6種の夏鳥が記録された。サンコウチョウとアカショウビンはおそらく森林地域で繁殖している可能性があるが、一部は渡りの中途に立ち寄ることもあるものと思われる。

アジサシ類は波照間島の西方海上に所在し、海鳥の繁殖地として国の天然記念物にもなっている仲御神島や八重山諸島に所在する無人の岩礁等で繁殖した個体の飛来と思われるが、一部は波照間島の西の浜西方にある岩礁で繁殖している可能性がある。

なお、本州では夏鳥として渡来するアオバズクは、県内には冬季にも生息している亜種リュウキュウアオバズクとされているので、波照間島でも留鳥として扱った。また、本州では夏鳥として渡来するホトトギスは、波照間で傷病鳥として保護例があったが、本種については県内での託卵の報告が無いことから、旅鳥として扱った。

3) 旅鳥及び冬鳥の生息状況

夏鳥以外の渡り鳥である旅鳥や冬鳥には、サシバ、アカハラダカ、シロハラ、ムナグロ、ツメナガセキレイ、ウズラシギ、エリマキシギ、タシギ、セイタカシギ、ダイサギ、アマサギ、タゲリ、マミジロタヒバリ、ツバメチドリなど50種が記録された。その種数は波照間島で記録された鳥類全体の約7割(64.9%)を占めていた。これは波照間島がいかに渡り鳥にとって、その越冬地や中継地として重要な島であることを示している結果であろうと思われた。

2. 定点メッシュ調査で確認された鳥類

表3に示したように、1998年2月(冬季)の調査で、13メッシュで36種の鳥類が確認された。そのうち留鳥は12種で、波照間島で冬鳥としての越冬や、もしくは旅鳥として一時的に立ち寄るものと考えられる渡り鳥が24種あった。その中ではほぼ全体のメッシュで出現した種はヒヨドリやキジバトなどの留鳥であった。したがって、これらの留鳥は島内全域に広く生息分布していることが示唆された。また、草原やギンネム林などで生息確認されたツバメチドリやマミジロタヒバリ、キマユムシクイ、タゲリなどはこれまで波照間島での記録が知られておらず初確認と思われた。さらに、名石集落と南集落の間にあるドリーネに残存する御嶽林(広葉樹林)でさえずっているアカヒゲの1個体を確認した。本種については、これまで八重山諸島に留鳥として生息するとされるウスアカヒゲではなく、渡りを行っていると考えられているナミアカヒゲと思われた。したがって、波照間島は留鳥の生息地であるとともに、冬鳥や旅鳥にとって一時的な生息地を提供してくれる重要な地域

表3 定点メッシュ調査 (集計1)

調査期日	98/02/24	98/02/24	98/02/24	98/02/24	98/02/25
調査地名	名石集落前溜池	星座観測センタ-	星座観測センタ-西	名石・南集落	空港西
調査メッシュ	39230661	36230653	362306-52	39230662	36230663
調査時間	12:30-13:00	14:00-14:30	14:45-15-15	7:35-8:05	8:20-8:50
調査天気	小雨	小雨	小雨	曇り	くもり
調査環境	ため池・住宅地	草原・ギンネム林	放牧地・農耕地	広葉樹林・集落	ギンネム林
	農耕地・屋敷林	放牧地・海岸	ギンネム林	屋敷林・ドリネ	農耕地
種 名	個体数	個体数	個体数	個体数	個体数
シロガシ	15			1	1
ヒヨドリ	2	1	1	5	4
キジバト	2	2	5	2	2
スズメ	5				
メジロ	2		2	7	4
アカモズ	1				
タヒバリ	4				
ツバメ	1	8	2		
イソシギ	1				
コガモ	12				
ヒキケイ	1				
コチドリ	1				
タシギ	1				
カイツブリ	3				
ツバメチドリ		2	2		
セッカ		3	3	1	6
ムナグロ		21			11
シロチドリ		3			
マシロタヒバリ		6			
オサハシブトガラス		5	1	4	
アマサギ			2		
コサギ			1		
シロハラ				1	1
シロハラクイナ				1	
アカヒゲ				1	
サシバ					1
ウグイス					1
キマユシクイ					
チュウサギ					
タケリ					
ツバメチドリ					
アオサギ					
タヒサギ					
クロサギ					
バン					
ホトトギス					
個体数合計	51	51	18	23	31
種 数	14	9	9	9	9

表3 定点メッシュ調査 (集計2)

調査期日	98/02/25	98/02/25	98/02/25	98/02/25	98/02/25
調査地名	空港	空港南	富嘉の南	富嘉の南西	毛原岬
調査メッシュ	36230664	362306-54	362306-51	362306-50	362306-60
調査時間	10:45-11:15	11:20-11:50	12:30-13:00	13:30-14:00	14:03-14:33
調査天気	くもり	くもり	くもり	くもり	くもり
調査環境	草地・農耕地	アダン林・海岸	ギンネム林	農耕地・アダン林	ギンネム林
	海岸林	草原・放牧地	牧草地・溜池	ギンネム林	海岸・農耕地
種 名	個体数	個体数	個体数	個体数	個体数
シガシ	4				1
ヒョドリ	3	1	2		2
ギンバト	6	1	2	2	
スズメ					1
メジロ	1	1	6	1	2
アカモズ					1
タヒバリ					
ツバメ		2			1
ツシギ					2
コガモ					
セキレイ					
コチドリ					
タシギ					
カイツブリ					
ツバメチドリ					
セッカ	6	5	1	1	
ムナグロ					
シロチドリ					
マミジロタヒバリ					
オサハシトガラス	2		3		
アマサギ			1		
コサギ			1		
シロハラ					
シロハラクイ					
アカヒゲ					
ザンバ					1
ウグイス	1	1			
キマユシイ			1		
チュウサギ			2		
タケリ			1		
ツバメチドリ			1		
アオサギ			3		
ダイサギ			1		
クロサギ			1		
バン					
メボロシイ					
個体数合計	23	11	26	4	11
種 数	7	6	14	3	8

表3 定点メッシュ調査 (集計3)

調査期日	98/02/25	98/02/25	98/02/25	
調査地名	波照間港	ブリアチ公園	シムケ	
調査メッシュ	362306-71	362306-72	362306-73	
調査時間	14:35-15:05	15:08-15:38	15:40-16:10	
調査天気	くもり	くもり	曇り	
調査環境	ギンネム林・港	広葉樹林・公園	農耕地・ため池	
	海岸林	ため池・海岸林	ギンネム林	
種 名	個体数	個体数	個体数	総個体数
シロガシラ	1			23
ヒヨドリ	1	1		22
キジバト			1	25
スズメ	2			8
メジロ	5		1	32
アカモズ				2
タヒバリ				4
ツバメ	1		11	26
イソギ			1	4
コガモ				12
キセキレイ				1
コチドリ				1
タシギ				1
カイツブリ				3
ツバメチドリ				4
セッカ		1		27
ムナグロ				32
シロチドリ				3
マミジロタヒバリ				6
オサハシトカラス	10	7	21	53
アマサギ				3
コサギ				2
シロハラ		1	1	4
シロハラクイナ				1
アカヒゲ				1
サンバ		1		3
ウグイス				3
キマユシクイ				1
チュウサギ		1		3
タケリ				1
ツバメチドリ				1
アオサギ	4			7
ダイサギ				1
クロサギ				1
バン		3		3
メボロムシクイ			1	1
個体数合計	24	15	37	325
種 数	7	7	7	7.3

となっていることが示唆される。

3. 波照間島で記録された貴重種

ここで扱う貴重種の範疇は、①琉球列島の固有種、②天然記念物などの保護すべき種、③環境庁編（1991）による「日本の絶滅のおそれのある野生生物」（日本版レッドデータブック、NRDBと略す）の掲載種や沖縄県自然保護課編（1996）による「沖縄の絶滅のおそれのある野生生物」（沖縄版レッドデータブック、ORDBと略す）の掲載されている種をその範囲とした。波照間島で記録されている鳥類の中で該当する種は、表4に示したとおり17種であった。その中で主な鳥類についての生息概要や確認状況について、以下に述べる。

（1）アカヒゲ（*Erithacus komadori*）

国の天然記念物で琉球列島固有種のナミアカヒゲと思われる1個体が、1996年10月に電力会社の窓ガラスに衝突して保護された。また、1998年2月の定点メッシュ調査では、南集落と名石集落との間にある大底御嶽の林内で囀っている1個体を確認した。本種は環境庁編（1991）の「日本の絶滅のおそれのある野生生物」では「危急種」として登載されている貴重種である。本個体は脇に黒帯がでることから沖縄産と異なり、奄美諸島や男女群島に産するナミアカヒゲ *E. komadori komadori* と考えられた。川地ら（1989）は琉球列島北部に生息するアカヒゲが琉球列島南部に渡ることを確認し、これまで八重山諸島に生息しているとされるウスアカヒゲ *E. K. Subrufus* をナミアカヒゲのシノニムとする考えを提唱している。したがって、この考えにしたがうと今回波照間島で見つかったアカヒゲは、ナミアカヒゲの可能性が高いように思え、ナミアカヒゲの渡りを支持しているものと考えられた。

なお、本亜種の記録は、おそらく波照間島における初めての確認であろう。

（2）セイタカシギ（*Himantopus himantopus himantopus*）

県内では秋期や冬季に旅鳥もしくは冬鳥として渡来するが、波照間島では島内に設置された2カ所の溜池で最高5個体が確認された。本種は日本版レッドデータブック（環境庁編 1991）で希少種とされている種であり、波照間島からの初めての記録と思われる。波照間島にはシギ・チドリ類が渡来する湿地が少なく、農業用の溜池がかろうじて水辺の鳥類の生息地となっているので、本種も溜池でのみ確認された。

（3）チュウサギ（*Egretta intermedia intermedia*）

県内では秋期や冬季に旅鳥もしくは冬鳥として渡来し、牧草地や干潟などに生息する種

である。波照間島では島内に設置された溜池と島の南部にある牧草地や農耕地で目撃された。

(4) リュウキュウツミ (*Accipiter gularis iwasakii*)

ブリブチ公園近くの森林部や名石集落にある溜池のフェンスに止まっている個体が目撃された。おそらく本個体は八重山諸島に留鳥として生息する亜種リュウキュウツミであろうと思われた。

(5) カワセミ (*Alcedo atthis bangalensis*)

県内では留鳥として河川や池沼などに生息し、沖縄版レッドデータブック (沖縄県自然保護課編 1996) では希少種として扱われている。本種は島の南西部の溜池で亜成鳥 1 個体が目撃され、波照間島でも繁殖していることが裏付けられた。

(6) カイツブリ (*Podiceps ruficollis poggei*)

県内では留鳥として河川や池沼などに生息し、沖縄版レッドデータブック (沖縄県自然保護課編 1996) では希少種として扱われている。本種は島の北部の溜池で成鳥 1 個体が目撃された。おそらく、波照間島でも留鳥として生息しているのであろう。

(7) リュウキュウコノハズク (*Otus elegans elegans*)

集落周辺にある御嶽林や街路樹、農耕地の間にわずかに残る森林部で夜間鳴き声が聞か

表 4. 波照間島で記録されている貴重種

種 名	天然記念物	琉球列島固有種	NRDB			ORDB		
			絶滅危惧	危急	希少	絶滅危惧	危急	希小
ナミアカヒゲ	◎	◎	◎					◎
オオクイナ			◎			◎		
カイツブリ								◎
ツバメチドリ					◎			◎
カツオドリ								◎
チュウサギ					◎			◎
ミサゴ			◎			◎		
リュウキュウツミ			◎			◎		
ミフウズラ								◎
シロチドリ								◎
アカアシシギ					◎			◎
セイタカシギ					◎			◎
エリグロアジサシ					◎			◎
ベニアジサシ					◎			◎
ヤツガシラ								◎
カワセミ								◎
リュウキュウコノハズク								◎

4. 波照間島の鳥類の方言名

今回の調査で収集された野鳥の方言名については、表5に示したように該当する種が不明な方言名やサギ類やウ類などのようにグループを総称する方言名、同じ種であるが鳴き声により2つの呼び名を持つウグイスやアオバズクなどを含めて38個の方言名が得られた。その中には今回の現地調査で確認できなかった水辺に生息するリュウキュウヨシゴイやオオクイナ、ヒクイナ、カルガモと、森林地域に生息するズアカアオバトなど5種が含まれている。しかしながら、オオクイナとカルガモについては聞き取り調査での生息確認がされた。したがって、リュウキュウヨシゴイやヒクイナなどは水田や湿地など水辺に生息する種であるので、水田地域が全く見られない今日では、環境の変化に伴い個体数が減少していることが考えられる。また、同様に森林面積の減少に伴いズアカアオバトなど森林性の留鳥であるハト類も減少していることが考えられる。したがって、方言名から3種の未確認種が識別でき、潜在的な鳥類相を伺わせる資料が得られた。しかしながら、調査期間が短く、方言名については、鳥類に限定したものであり、しかも集落間の方言名等の差異を示した方言地図の作成までには至らなかった。天野(1981)は植物名については集落間の差異は見られなかったとしているので、野鳥の方言名でも差異は少ないものと思われるが、これは鳥類以外の生物方言名の収集と合わせて今後の調査課題であろう。

おそらく、鳥類以外にも動植物の方言名は残っているものと思われ、潜在的な自然を伺い知る貴重な資料として、今後とも収集しておく必要があるものと思われる。

以下に採集された方言名について、その由来等について検討を加えた。

4-1. 野鳥の方言名の由来について

1) 鳴き声に由来するもの

グワッグワッ [gwa?gwa?] のリュウキュウヨシゴイ、ヨータケのアオバズク、ヤマフチウリウ [jamafutsiri] のウグイス、ゴカル [gokaru] のアカショウビンなどがそれにあたる。ヨーガラシウ [jo:garasi] のゴイサギは、夕刻に姿も見えないのに「ガアー、ガアー」とカラスに似た声で一声づつ鳴いて飛び回ることから名付けられ、ファードウリウ [fa:du:ri] のオオクイナは赤ん坊の鳴き声に似ていることから名付けられている。

ウグイスについては「ホーホケキョ」と繁殖期のさえずりをウグイスとし、「チャ、チャ、チャ」と冬季の「地鳴き(笹鳴き)」を別の種類と考え、ヤマフチリ [jamafutsiri] としている。同様に、アオバズクは鳴き声の「ホウホウ、ホウホウ」をヨータケとし、アオバズクそのものをスククル [sukukuru] としているなど鳴き声と鳥体の不一致がみられるものもある。

2) 生態や生息地に由来するもの

ガヤブリヤ [gajaburja] のセッカ、ガヤクムリヤ [gajakumurja] のヒクイナ、タナクムリヤ [tānakumurja] のバンなどがそれにあたる。これらの種の主な生息地としてのスキ原や水田などに隠れてすむことからきているものと思われる。興味深いことにアンタグ [ʔantagu] と呼ばれるウ類は、魚を捕らえて頭からスムーズに丸のみするウ類の習性を持っている。このことから、子どもが小魚を食べるときに喉にかからないように「アンタグ、アンタグ」と言って「おまじない」として使われている。子を思う親の気持ちが如実に表れている。

フキタガ [fukitaga] と呼ばれているタカは該当種がなく、種は不明であるが、名前の由来は遅れて渡ってくるタカ、あるいはのんびりとゆったりとはばたきながら飛ぶタカをさすものとされ、大型のタカである可能性がある。このことから一番考えやすいのは西表にすむカンムリワシが飛来してきて目撃されたか、あるいは森林面積が多く自然環境が良好であった時期には生息していて目撃された可能性が高い。

3) 色彩や形態に由来するもの

オーパト [ʔorpatō] のズアカアオパト、ダイバンドウリウ [daibandurī] のカツオドリ、アガヨーラ [ʔagajoɾa] のリュウキュウヨシゴイなどがそれにあたる。

アガヨーラ [ʔagajoɾa] のリュウキュウヨシゴイは赤いヨーラ（サギ）の意味である。ダイバンドウリウ [daibandurī] のカツオドリは、大型鳥の意であり、近海カツオ船がカツオの群を探す時に、その目標となる鳥群を構成するアジサシ類やミズナギドリ類などの海鳥に混じって、その中では目立って大型の海鳥であることに由来するものと思われる。おそらく、波照間島でカツオ漁が始まった頃（1910年代）に生まれた呼び名と考えられ、その起源は新しいものと思われる。カツオドリと同じようにセグロアジサシやベニアジサシなども「インドリ」（海鳥）であるが、尾羽がツバメのように特に切れ込んでいることからマタサ [matasa]（ツバメ）と呼ばれ、クロアジサシは色が黒いことからガリウシ [gariʃi]（カラス）と呼ばれて、漁師がカツオの群を探し出す重要な目印の鳥として名付けられたようである。

4) 渡来する時期からくるもの

ズグヤドリウ [dzugujadurī] のキセキレイ、ツメナガセキレイ、キセキレイなどがそれにあたる。ちょうどこれらのセキレイ類は県内には秋口に旅鳥として渡来してくるため、「ズグヤ」は、つまり「十五夜」のことで、中秋名月である十五夜の頃に見られることに由来しているものと思われる。

アカハラダカはタカマー [takamaɾ] (小型のタカの意) とされ、タカ (サシバ) の前に渡ってくる小型のタカとして認識されている。県内でアカハラダカの渡りが確認されたのは、1980年の宮古島における観察記録が最初であるが、島の人たちは経験的にこのタカが琉球列島を渡っていたことを知っていたことが伺える。

5) 瑞鳥としての扱いから由来するもの

ユガドゥリウ [jugaduri] の白鷺類 (コサギ、チュウサギ、ダイサギ、アマサギなど) は、「ユガフドリ」の転訛と考えられる。「ユガフ」、つまり白鷺類は五穀豊穡や果報をもたらすものとして認識されていることがわかる。

6) 古語 (古名) から転訛したと考えられるもの

シギ・チドリ類はまとめてシヌリ [sɯnuri] と呼ばれているが、これは「チドリ」の古語からの転訛と考えられる。また、ハヤブサをさすペフチャ [pefɯtʃa] は「ハヤブサ」の古語からの転訛だと思われる。しかしながら、波照間島では留鳥と考えられるツミもこう呼ばれていることから、冬鳥のハヤブサと同じ種の扱いをしていて混同が見られる。

4-2. 波照間島における野鳥の方言名の言語学的な特徴について

波照間方言の音韻についての研究は、加治工 (1996) により詳細に報告されている。加治工 (1996) を元に今回採集された波照間方言の野鳥名に現われる発音の特徴を見てみると、一定の法則性が認められ、ほぼ次のようにまとめることができる。

(1) 奈良時中央語のス、ズ、ツの後の u 母音は、波照間方言ではイウ [i] に対応する。

(例: [garasi] カラス: 「可良須」万、3522.)

(2) 奈良時中央語のラ行イ段音は、波照間方言では、リウ [ri] に対応する。

(例: [turi] 鳥: 「等利〜」万、876.)

表5. 波照間島における野鳥の方言名
話手：島村修（大正15年生・男・波照間島富嘉出身）

和 名	方言名	音声表記	備 考（由来、いわれ、注記等）
カツオドリ	ダイバンドウリウ	daibandurī	鰹漁が始まった頃に名付けられたと考えられる。「ダイバン」は大きいの意。
ウ類	アンタグ	?antagu	子どもに小魚などを食べさせるとき、喉にかからないように「アンタグ、アンタグ」とまじないのように言って食べさせた。「アンタグ」とはカワウとウミウの両方と呼ぶ。
リュウキュウヨシゴイ	アガヨーラ グワグワツ	?agajo:ra gwa?gwa?	鳴き声から「グワッ、グワ」と付けた。ヨーラは五位の仲間、サンは鷺（サギ）の仲間の意。アガヨーラは赤いヨーラの意。
ゴイサギ	ヨーガラシウ	jo:garasī	夜ガラスの意で、不吉な鳥として嫌われる。
アマサギ	ソンサミヤ (ユガドゥリウ)	sonsamja jugadurī	夏羽で頭部が赤褐色になったものを「ユガドリ」という（ユガフドリの転訛）。白鷺類（コサギ、チュウサギ、ダイサギ）も同様に「ユガドリ」という。
クロサギ	イナーサン	?ina:saŋ	海鷺（ウミサギ）の意。黒色型・白色型とも同じ呼称。
カルガモ	ガードゥリウ	ga:durī	
コガモ	ピマンガードゥリウ	p'i:maŋga:durī	ヒヨドリのように小型の鴨（カモ）の意。
ミサゴ	タンタグ	tantagu	
アカハラダカ	タカマー	ta:kama:	小型のタカの意。
ツミ	ペフチャ	pefʊtʃa	
サシバ	タカ	taka	越冬するサシバをさす。ウチダカ（落ちダカ）と同義。
チョウゲンボウ	マシウパン	masi:paŋ	パンは歯の意。
ハヤブサ	ペフチャ	pefʊtʃa	ツミとハヤブサを同じ種として混同している可能性がある。
不明	フキタガ	fʊkitaga	対応する種名が不明で、トビやカンムリワシ、チュウヒなどをそう呼んだ可能性がある。
ミフウズラ	ウジウラ	?udzira	
オオクイナ	ファードゥリウ	fa:durī	鳴き声が赤んぼうの鳴き声ににている。

和 名	方言名	音声表記	備 考（由来、いわれ、注記等）
ヒクイナ	ガヤクムリャ	gajakumurja	カヤ原の中にこもっているの意。
バン	タナクムリャ	tãnakumurja	水田の中にこもっているの意。
シギ・チドリ類	シウヌリウ	sĩnurĩ	チドリの転訛。シギ・チドリ類は総称して「シウヌリウ」と呼んでいる。
アジサシ類	インドウリウ マタサ ガリウシウ	matasa garĩsĩ	海鳥の意。セグロアジサシ、ベニアジアシエリグロアジサシは特に「マタサ（ツバメの意）」と呼ばれ、クロアジサシは「ガリウシ（カラスの意）」と呼ばれる。カツオ漁に従事する人たちが付けた名前。
キジバト	パトン	patoŋ	
ズアカアオバト	オーバト	ʔoɿpato	波照間産はチュウダイズアカアオバト。
コノハズク	マシカク	maʃĩkaku	マヤスクグルの転訛。マヤはネコの意。
アオバズク	スククル ヨータケ	sũkukuru	夜の鳴き声（ホウホウ）を「ヨータケ」と言う。鳴き声は別の種類と考えたらしい。
アカショウビン	ゴカル	gokaru	
ツバメ	マタサ	matasa	
セキレイ類	ズグヤドリウ	dzugujadurĩ	中秋の十五夜頃に渡来してくるためその名がついた。外にツメナガセキレイやハクセキレイ、キセキレイも同様の呼び名。
ヒヨドリ	ピマン	pĩmaŋ	波照間産はイシガキヒヨドリ。
ウグイス	ウグイス ヤマフチウリウ	jamafutsĩrĩ	囀りは「ウグイス」、地鳴き（笹鳴き）は「ヤマフチウリウ」と呼び、それぞれ別の種類と考えたらしい。
セッカ	ガヤブリャ	gajaburja	カヤ原の中にいるものの意。
メジロ	フナドリウ	funadurĩ	
スズメ	ミシュドウリウ	miʃudurĩ	
コムクドリ	ジンフナドウリウ	dʒinfunadurĩ	
オサハシブトガラス	ガリウシ	garĩʃi	

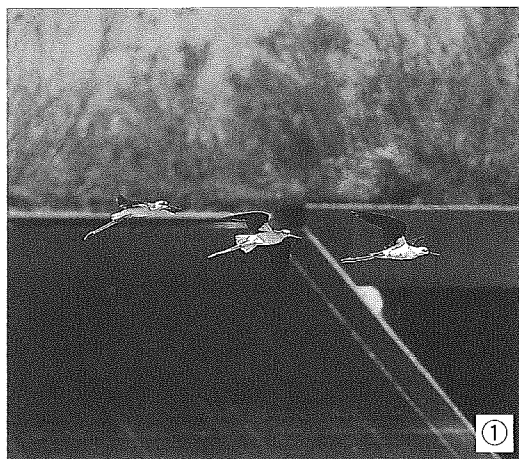
<要約>

1. 1996年から1998年の足掛け3カ年間に3回にわたり波照間島で鳥類調査を行い、59種の鳥類を記録し、暫定的にこれまでの鳥類記録をまとめ、77種の鳥類目録作成を試みた。
2. 観察された鳥類の中には、エリマキシギ、セイタカシギ、タゲリ、ツバメチドリ、アカヒゲなど36種の鳥類が波照間島における初めての記録と思われた。
3. 鳥類と島の人々との関わりや潜在的な自然を知るため野鳥の方言名調査を実施し、38種の方言名を採集して、その方言名の由来や言語学的転訛について若干の考察を試みた。

<引用文献>

- 天野鉄夫 1979. 琉球列島植物方言集. 新星図書出版. 303pp.
- 天野鉄夫 1981. 先島群島の主要御嶽の植物方言名. 沖縄県社寺・御嶽林調査報告VI, 沖縄県天然記念物調査シリーズ第21集. 283-316. 沖縄県教育委員会.
- 琉球新報社編 1983. 奄美・沖縄鳥類目録, 写真集沖縄の野鳥; 誠文堂新光社. 54-62.
- 川路則友・樋口広芳 1989. アカヒゲ *Eritacus komanori* の分布ならびに亜種の問題について. 昭和63年度環境庁委託調査. 71-88. 環境庁.
- 木崎甲子郎 1985. 琉球弧の地質誌. 沖縄タイムス. 278pp.
- 加治工真市 1996. 波照間方言の音韻研究. 法政大学沖縄文化研究所紀要. 沖縄文化研究(22) 137-181
- 野原三義・宮城邦治 1988. 加計呂麻島の動物方言語彙. 地域研究シリーズNO.11. 鹿児島県大島郡瀬戸内町調査報告書(2). 沖縄国際大学南島文化研究所. 125pp.
- 新納義馬 1981. 竹富町波照間の御嶽林. 沖縄県社寺・御嶽林調査報告IV. 247-267. 沖縄県教育委員会
- 宮城邦治 1982. 波照間島の植生概観と動物相. 地域研究シリーズNO.3. 波照間島調査報告書. 沖縄国際大学南島文化研究所.
- 中村一恵・花輪伸一 1987. 琉球諸島産シロガシラの分類と分布変遷. 昭和61年度環境庁委託調査, 特殊鳥類調査(ノグチゲラ・ヤエヤマシロガシラ). 日本野鳥の会: 39-58.
- 日本鳥学会目録編集委員会編 1997. 日本産鳥類リスト. 日本鳥学会誌(46) 1: 59-91.
- 嵩原建二 1993. 波照間島の鳥類と哺乳類. 沖縄県立博物館紀要第19号.
- 当山昌直 1987. 伊計島の動物の方言. 沖縄県立博物館総合調査報告書IV, 伊計島. 35-43.
- 当山昌直 1983. 阿嘉島の動物の方言について. 沖縄県立博物館調査報告書III, 座間味村. 23-29. 沖縄県立博物館.
- 当山昌直 1984. 浜比嘉島の動物方言. やちむん8. 53-61.
- Utida, T. 1969. Rat-control procedures on the Pacific islands, with special reference to the efficiency of biological control agents. II. Efficiency of the Japanese weasel, *Mustela sibirica itatsi* Temminck & Schlegel, as a rat-control agent in the Rryukyus.
- 八重山野鳥の会編 1983. 10周年記念誌. 八重山野鳥の会: 75pp.

PLATE



①：セイタカシギ
④：ウズラシギ

②：エリマキシギ
⑤：ツバメチドリ

③：カワセミ
⑥：タゲリ

波照間島の鳥類目録 (暫定)

カイツブリ目 PODICIPEDIFORMES

カイツブリ科 PODICIPITIDAE

カイツブリ *Podiceps ruficollis poggei*

ペリカン目 PELECANIFORMES

ネットタイチョウ科 PHAETHONTIDAE

シラオネットタイチョウ *Phaethon lepturus dorotheae* ⁽¹⁾
(1996/5)

カツオドリ科 SULIDAE

カツオドリ *Sula leucogaster plotus*

コウノトリ目 CICONIIFORMES

サギ科 ARDEIDAE

ゴイサギ *Nycticorax nycticorax nycticorax*

ササゴイ *Butorides striatus amurensis*

アマサギ *Bubulcus ibis coromandus*

ダイサギ *Egretta alba modesta*

チュウサギ *Egretta intermedia intermedia*

コサギ *Egretta garzetta garzetta*

クロサギ *Egretta sacra sacra*

アオサギ *Ardea cinerea jouyi*

カモ目 ANSERIFORMES

カモ科 ANATIDAE

カルガモ *Anas poecilorhyncha zonorhyncha*

コガモ *Anas crecca crecca*

ハシビロガモ *Anas clypeata*

タカ目 FALCONIFORMES

タカ科 ACCIPITRIDAE

ミサゴ *Pandion haliaetus haliaetus*

アカハラダカ *Accipiter soloensis*

リュウキュウツミ *Accipiter gularis iwasakii*

サシバ *Butastur indicus*

ハヤブサ科 FALCONIDAE

チョウゲンボウ *Falco tinnuncius innterstinctus*

ツル目 GRUIFORMES

ミフウズラ科 TURNICIDAE

ミフウズラ *Turnix suscitator okinavensis*

クイナ科 RALLIDAE

- オオクイナ *Rallina eurizonoides sepiaria* ⁽¹⁾
シロハラクイナ *Amaurornis phoenicurus chinensis*
バン *Gallinula chloropus indica*

チドリ目 CHARADRIIFORMES

チドリ科 CHARADRIIDAE

- コチドリ *Charadrius dubius curonicus*
シロチドリ *Charadrius alexandrinus nihonesis*
ムナグロ *Pluvialis fulva*
タゲリ *Vanellus vanellus*

シギ科 SCOLOPACIDAE

- キョウジョシギ *Arenaria interpres interpres*
ウズラシギ *Calidris acuminata*
エリマキシギ *Philomachus pugnax*
アカアシシギ *Tringa totanus ussuriensis*
アオアシシギ *Tringa nebularia*
クサシギ *Tringa ochropus*
タカブシギ *Tringa glareola*
イソシギ *Tringa hypoleucos*
キアシシギ *Tringa brevipes*
タシギ *Gallinago gallinago gallinago*

セイタカシギ科 RECURVIROSTRIDAE

- セイタカシギ *Himantopus himantopus himantopus*

ツバメチドリ科 GLAREOLIDAE

- ツバメチドリ *Glareola maldivarum*

カモメ科 LARIDAE

- クロハラアジサシ *Sterna hybrida javanicus*
ベニアジサシ *Sterna dogallii bangsi*
エリグロアジサシ *Sterna sumatrana*
クロアジサシ *Anous stolidus pileatus*

ハト目 COLUMBIFORMES

ハト科 COLUMBIDAE MONARCHINAE

- リュウキュウキジバト *Streptopelia orientalis stimpsoni*
チュウダイズアカアオバト *Sphenurus formosae medioximus*

カッコウ目 CUCULIFORMES

カッコウ科 CUCULIDAE

- ホトトギス *Cuculus poliocephalus poliocephalus* ⁽¹⁾
-

フクロウ目 STRIGIFORMES

フクロウ科 STRIGIDAE

リュウキュウコノハズク *Otus elegans elegans*

リュウキュウアオバズク *Ninox scutulata totogo*

ブッポウソウ目 CORACIIFORMES

ヤツガシラ科 UPUPIDAE

ヤツガシラ *Upupa epops saturata* ⁽²⁾

カワセミ科 ALCEDINIDAE

アカショウビン *Halcyon coromanda*

カワセミ *Alcedo atthis bangalensis*

スズメ目 PASSERIFORMES

ツバメ科 HIRUNDINIDAE

ツバメ *Hirundo rustica gutturalis*

セキレイ科 MOTACILLIDAE

ツメナガセキレイ *Motacilla flava taivana*

キセキレイ *Motacilla cinerea robusta*

ハクセキレイ *Motacilla alba lugens*

マミジロタヒバリ *Anthus novaeseelandiae sinensis*

ムネアカタヒバリ *Anthus cervinus*

タヒバリ *Anthus spinoletta japonicus*

ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE

タイワンヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis amaurotis*

シロガシラ *Pycnonotus sinensis*

モズ科 LANIIDAE

シマアカモズ *Lanius cristatus lucionensis*

ツグミ科 TURDINAE

ナミアカヒゲ *Erithacus komadori komadori*

*沖縄電力波照間営業所で保護 (1996/10/3)

ノゴマ *Erithacus calliope*

イソヒヨドリ *Monticola solitarius philippensis*

トラツグミ *Zoothera dauma aurea*

アカハラ *Turdus chrysolaus chrysolaus*

シロハラ *Turdus pallidus*

マミチャジナイ *Turdus obscurus*

ウグイス科 SYLVIINAE

ウグイス *Cettia diphone cantans*

キマユムシクイ *Phylloscopus inornatus inornatus*

メボソムシクイ *Phylloscopus borealis*

*波照間中学校で保護 (1996/10/21)

セッカ *Cisticola juncidis brunniceps*

カササギヒタキ科

サンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata atrocaudata*

*波照間中学校で保護 (1997/9/3)

メジロ科 ZOSTEROPIDAE

リュウキュウメジロ *Zosterops japonica loochooensis*

ハタオリドリ科 PLOCEIDAE

スズメ *Passer montanus saturatus*

ムクドリ科 STURNIDAE

コムクドリ *Sturnus philippensis* ⁽²⁾

カラス科 CORVIDAE

オサハシブトガラス *Corvus macrorhynchos japonensis*

備考：1. 本目録の種名の扱いや順序については、日本鳥学会目録編集委員会 (1997) によった。

2. 目録は宮城 (1982)、嵩原 (1993) および今回の調査結果をまとめて作成した。

3. 現地調査は1996年8月21日から8月26日までの7日間と1997年9月3日から5日までの3日間、1998年2月24日から2月25日の2日間の合計11日である。

4. (1) は西里私信、(2) は金城私信。